

子ども食堂エピソード共有ワークショップ 開催レポート（要約）

<2025年12月6日／酒田労働者福祉センター>

1. 概要

酒田市共生社会課とボラポートさかたが主催し、市内外の子ども食堂運営者 5 団体が集まり、「こども食堂で出会った変化のエピソード」をテーマにエピソード共有と意見交換が行われた。むすびえの進行のもと、参加者同士のグループトークも実施され、市内での子ども食堂活動の理解やネットワークづくりを深める場となった。

2. 当日の流れ

1. 開会
2. エピソードトーク（5 団体）
3. 休憩
4. グループトーク「本日の感想」
5. まとめ
6. ボランティア・公益活動アクション紹介
7. 閉会

※プログラム通り進行。

3. 参加人数について

- ・参加者の定員は 60 名だったが、座席 9 グループに対して 5 人以上が参加していたため、50 人程度は参加していたと思われる（運営側も含めるとそれ以上）。
- ・年齢層は大人中心ではあるものの、子供など若い世代も多くみられた。参加者のほとんど全員がこども食堂について認知していたが、実際に参加したことがあるのは半数弱だった。
- ・ボランティアや支援を行っている企業の人など、こども食堂運営者の関係者が中心ではあるが、こども食堂に興味を持って初めて参加する人もおり、私自身、嬉しく思った。

4. エピソードトークまとめ（5 団体）

【エピソードを紹介いただいた運営者の方々】

キッチンおとひめ（酒田市・黒森）小林 順子さん
酒調こども食堂（酒田市・酒田調理師専門学校）小野寺 梓乃さん
庄内ちいき食堂（庄内）疋田 司さん
らくやこども食堂（鶴岡市）栗原 穂子さん
んめもん食堂（酒田市・十坂）五十嵐 純さん

【ファシリテーター】

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
ディレクター 渋谷 雅人さん

（1）庄内ちいき食堂・疋田さん

キーワード：『肥（こえる）』

- ・子どもを「お腹いっぱいにしてあげたい」思いで始めた活動。
- ・SNSでの発信をきっかけに寄付・野菜・お米などが集まり、登録は約200名に成長。
- ・4年間で延べ3,000名近くが参加し、団体自体も「肥えて（成長して）」いったという実感。
- ・「地域に各学区1つ子ども食堂ができたら理想」と語る。

（2）らくやこども食堂（ぼらんたす）・栗原さん

キーワード：『笑顔に変わるとき』

- ・9年にわたる活動の中で、緊張して来る子どもが徐々に笑顔になる瞬間を大切にしている。
- ・最近の例：人見知りの子が、物を投げる癖を注意され「そっと置く」ことができ、家族と成長を喜び合えた。
- ・小さな空間だが、親子・高校生・地域の人まで幅広く参加し、温かい雰囲気が生まれている。

（3）んめもん食堂（サテライトサカ）・五十嵐さん

キーワード：『廃校』

- ・地域の小学校が統合で廃校になると聞き、「地域の集いの場を残したい」と思い立ち開設。
- ・「同じ釜の飯を食う」ことで地域のつながりをつくりたいという思いが原点。
- ・市の共生社会課やボラポート、地域の人々の助言を受け、半年で開設に至る。

- ・乳児から高齢者まで約40～50人が参加し、地域の居場所として育っている。

（4）キッチンおとひめ（みんなの居場所 古民家玉手箱）・小林さん

キーワード：『一緒にやってみよう 挑戦！！』

- ・食べるだけでなく、みんなで作り、挑戦し、楽しむスタイルの食堂。
- ・季節イベント、音楽会、畠体験、海釣り、バスツアーなど多様な企画を実施。
- ・子どもが「家では食べないけれどここでは食べる」など、共食による変化が見られる。
- ・子どもから高齢者まで一緒に挑戦して楽しめる場づくりを目指す。

（5）酒調こども食堂（酒田調理師専門学校）・小野寺さん

キーワード：『私が必要なことを』

- ・5人の子を育てるシングルマザー自身の「必要だった支援」を形にした活動。
- ・9～16時の学校開放を行い、好きな時間に学習・遊び・居場所として利用できる。
- ・12時の「みんなでいただきます」を重視し、赤ちゃん連れ・高齢者・学生など多世代交流が生まれる。
- ・「孤食を減らす」「大人との関わりをつくる」「学生との交流」など効果が大きい。

（6）むすびえより補足（進行：渋谷さん）

- ・全国の子ども食堂は約1万か所、山形県は約100か所。庄内地区は17か所。
- ・「食べられない子のための場所」というイメージが強いが、実際は誰でも参加できる地域の居場所が多数。
- ・高齢者が毎月の食堂を楽しみに散歩を続ける例や、世代交流から進路につながる例も紹介。
- ・子ども食堂は「支援する／される」という関係ではなく、ご飯と一緒に食べることで生まれる力”が中心にあると強調。

【全体の感想】

今回のワークショップでは、「食べるだけじゃない子ども食堂」の姿がエピソードを通して浮かび上がった。①子ども・保護者・高齢者・学生が自然につながり、②参加する人の小さな変化が周囲も笑顔にし、③地域を巻き込む活動へと成長していく。そんな“居場所としての子ども食堂”的価値が強く示された会となった。